

「神に称賛される私たちの生き方」

～自らが衰えること～

ピリピ 1:20～21

■ 森永製菓の創業者、森永太郎

お菓子メーカーの森永製菓の創業者である森永太郎さんは、若いころ陶器販売の仕事をしており、陶器を売のために渡米しました。しかし、事業はなかなかうまくいかず途方に暮れたある日、公園のベンチに座っていると一人の老婦人からアイスクャンディーをもらいました。初めてアイスクャンディーを食べた森永さんは、そのおいしさに感動し、日本に帰ってお菓子職人になることを決意しました。また、ある老夫婦の家で家事手伝いの仕事をしたときのことです。

その当時、日本人は差別されることが多かったのですが、その老夫婦は森永さんに優しく接してくれました。そのクリスチャン夫婦と接していく中で、森永さんは洗礼を受けることにしました。日本に戻り仕事に忙しかけていたころ、森永さんの妻は亡くなり、彼はもう一度人生を見直すことになります。本当は自分は何をしたかったのか…。そんな折、関東大震災が起こります。彼は受けるより与える人生でありたいと、被災者に無償でお菓子を配ったそうです。一人の女性と老夫婦の信仰に立った行動が、森永さんのそれまでの価値観、そしてその後の人生までも変えることになったのです。

■ 三浦綾子さんの『氷点』と『塩狩峠』

「氷点」…ある夫婦の娘が3歳の時に殺されてしまいます。それは妻が夫ではない男性と密会中のことでした。夫は妻に詰め寄ることもできず、亡くなった娘の代わりに女の子が欲しいとねだる妻に、復讐心から自分の娘の殺人犯の娘とされる女の子を引き取ることにしました。女の子は陽子と名付けられ、母親から愛情を受けて育ちます。しかしある日母親は、陽子がかつて自分の娘を殺した犯人の娘であることを知ります。それから母親は陽子に愛情を注げなくなり、ひどい仕打ちをするようになります。また陽子も、自分がこの夫婦の子どもではないことを知り、傷つきながらも明るく生きようとしていきます。

「塩狩峠」…主人公の永野信夫は、中学を卒業し裁判所に就職しました。作家でありクリスチャンでもある中村春雨と出会い、クリスチャンとしての姿を学びました。成長した信夫は結納の日、札幌へ向かう電車に乗りますが、その途中、電車が事故を起こし、客車は塩狩峠をスピードを上げながら下っていきます。このままでは客車は転落し、全員助からないだろう…。そこで信夫は自分の身を挺してこの客車を止めるのでした。

「氷点」は一時的な怒りや憎しみを晴らすため、何の罪もない一人の人の人生を貶めしてしまう話です。一方、「塩狩峠」では、主人公はクリスチャンと出会い、その姿を通して価値観を変えられ、自分の身を捨ててまでも多くの人の人生を救うのでした。

■ 生きることはキリスト、死ぬことも益です

私たちは、愛するひとり子を十字架に架けるほどの大きな神の愛を知り、価値観を変えられました。パウロも、自分の価値観に従い、それに反する者を捕えていましたが、イエス様と出会い価値観を変えられました。「それは私の切なる祈りと願ひにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語り、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」(ピリピ1:20-21) クリスチャンを迫害していたパウロが、イエス様と出会ったことで、恥じることなく大胆に語り、生きていてもたとえ死んだとしても、自分を通してキリストが宣べ伝えられることを喜ぶようになりました。私たちもこのように、たとえ今日死んでも益だったと言える最期を迎えられることを願います。私たちの信仰による行いで、キリストを宣べ伝えることができ、誰かの価値観や人生を変えられることを信じます。

■ 自分が衰えること

ピリピ人への手紙は、1章は試練の中の喜び、2章は奉仕の中の喜び、3章は信じることへの喜び、4章は与えることの喜びについて書かれています。あなたは今日の過程にいますか？喜ばないときに喜んでいきますか？

「私の身によって、キリストがあがめられることです(ピリピ1:20)」とは直訳すると「キリストが私の身体の中で大きくなることです」という意味です。今、自分の中の「自分」はどれくらい元気でしょうか？「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません(ヨハネ3:30)」とあるように、バプテスマのヨハネは、イエス様が現れたときに自分に死に、イエス様と共に働く者となりました。私たちも自分に死なな

ければいけません。なぜなら、自分の中の自分が衰えていないと、私たちはここぞという時に判断を間違えてしまうのです。私たちは一時的な感情や、目先のこと、自分の欲や思いによって、神様が与えようとしてくださっているギフトを手に入れることをできなくしてしまっているのです。

■ 「捨てるもの①自分の思い・価値観 ②ルール ③目線(物質、恋愛至上主義、地位名誉)」

自分の心に潜む自分…これが生きているため、私たちは触まれてしまいます。パリサイ人はルールをたくさん作り、それを守れない人を裁いていました。誰もが罪を犯すのに、人と比べてまだ自分はましだと思っているのです。原罪は、自分も相手も罪人にしていました。私たちは罪人の頭ですが、イエス様の十字架によって赦された罪人です。ルールを守れというのではなく、私たちはルールを守ることができないことを知らなければいけません。聖書は、私たちは赦されたからこそ、相手を赦し、愛し、共に励ましあえるように努力しなさいと教えています。

物質や恋愛至上主義、地位や名誉に目線が向くなら、その目線を取り去らなければいけません。私たちは自分の分を超えて持つてしまうと、それを正しく扱えず罪が増えてしまいます。私たちは欲で生きてしまうので、魂やお金などを管理する能力を持っていません。ですから、自分の思いや価値観、ルール、目線を捨て、心の中に潜む自分を衰えさせる必要があるのです。

■ 本物の自分に生きる

私たちの心の中では「偽物の自分」と「本物の自分」が戦っています。自分に衰えるとは、「偽物の自分」を衰えさせ、「本物の自分」に生きることです。本物の自分は神様が中心にいてくださって、その方から出される命令を喜びます。なぜならば神様は私たちを愛してくださっているのです。私たちが痛むような命令を出すことはなく、この命令は私たちの重荷にはならないからです。心の中で、「本当はこうすべきだ」という声が聞こえているはずですが、その声に「はい」と応答すべきですが、目の前のことに囚われていると「はい」と応答することができなくなるのです。

私たちは自分の思いと価値観を整理して、古いものを取り去り、今までのルールを捨て、比較をやめて、目線を変えなければなりません。目に見えるものではなく、目に見えないものが大切だと私たちは知っているのです。

■ 原罪とキリストの十字架の戦い

三浦綾子さんは自分の娘を幼くして亡くしています。三浦さんはその痛みを通り、「氷点」の母親に自分を重ね、欲や誘惑に遭う原罪があることを描きつつ、「塩狩峠」の永野青年のように生きたいと、キリストの道を描いています。イエス様が鞭うたれ、手に杭を打たれたのは、私たちの本当の心が戦いに打ち勝つためです。欲や自分の弱さに打ち勝ち、受くるより与える人になるためです。

■ 最後に…

私たちは原罪があるので、どれだけ豊かになっても心の渇きは満たされません。原罪とは自分自身という罪です。人を指さし、裁く罪です。他の誰かではなく、私が罪人であり、私がイエス様を十字架に架けたのです。イエス様はそんな私たちのために手足に杭を打たれ、私たちの生きる道を整えようとしてくださいます。その十字架に目を向けるとき、私たちは自らの罪を認め、赦された罪人として相手を赦し、生きることが出来ます。

■ 祈り

「どうか私の罪を赦してください。私は自分が罪人であることを忘れていました。自分の思いやルール、目線も価値観も捨てます。私が赦された罪人であることを思い起こさせてくださったことに感謝します。」

(要約者: 神達良子)

(2021年9月19日)